

開催地名	神奈川県 横須賀市
開催日時	令和6年11月10日(日)13:30～15:00
開催場所	追浜コミュニティセンター 北館 集会室
語り部	草 貴子(宮城県仙台市)
参加者	横須賀市民 103名
開催経緯	横須賀市では、震災時に住民が主体となって避難所を運営する避難所運営委員会の組織化を推進してきたが、取り組みが遅れていた避難所においても設立が完了するに至った。しかしながら、避難者自身が主体となって組織的に避難所の運営を進める必要がある中で問題意識にギャップがあったことから、実体験に基づく講話を聞く機会を設けることとなった。
内容	■はじめに 講演者の草貴子氏は、宮城県仙台市泉区の市名坂東町内会会長を務めるとともに、消防庁での防災活動にも長年携わってきた。東日本大震災を経験し、その後の復興支援や地域防災活動に尽力してきた実績を持つ。今回の講演では、震災当日の体験、地域における防災対策、そして未来に向けた備えについて語った。 ■あの日のこと 2011年3月11日、東日本大震災が発生した。草氏は仙台市内で地震に遭遇し、買い物中の店舗で立ってられないほどの激しい揺れを経験した。建物の崩壊や人々の悲鳴が響く中、なんとか外に避難したが、道路は寸断され、交通機関も停止し、混乱が広がっていた。 自宅に戻る途中、町内の人々が次々と公園に集まり始めているのを目にし、草氏も町内会長として避難所開設の準備に動いた。集会所を開放し、町内外の避難者を受け入れることを決めた。当日は気温が低く、厳しい寒さの中での避難生活が始まった。備蓄米を炊いて食事を提供し、毛布をかき集めて暖を取るなど、地域の力を活かしながら避難所運営を進めた。避難者は女性や子どもを中心に約100名に上り、混乱を防ぐために避難者の中からリーダーを選出し、共同生活のルールを定めながら秩序を維持した。 ■その後のこと 震災直後は電気・水道・ガスが途絶え、避難所の環境は厳しいものとなった。避難者が安心して生活できるよう、日々の運営には様々な工夫が求められた。例えば、トイレの衛生環境を保つために掃除の当番制を導入したり、情報共有の場として定期的にコーヒータ임을設けたりすることで、避難者同士の結束を深めた。 また、震災を機に、地域の防災体制を強化するため、避難所運営委員会を設立し、町内会だけでなく学校や地域団体とも連携を深める体制を整えた。防災訓練の実施、備蓄の充実、災害時の役割分担の明確化など、地域全体で次の災害に備える取り組みが進められた。 ■まとめ 草氏は、震災の経験から「地域の防災は、行政だけに頼るのではなく、住民一人ひとりの意識と行動が鍵を握る」と強調した。特に、女性の視点を活かした防災活動の重要性を訴え、日常の暮らしの中で自助・共助の意識を持つことが大切であると語った。 また、防災の基本として、次の三つのポイントを挙げた。 1. 家族や地域での防災計画の共有 家族と避難場所や連絡手段を事前に決め、非常時に備えることが重要である。また、地域の防災訓練に積極的に参加し、実際の避難行動をシミュレーションしておくことが求められる。 2. 避難時に必要な物資の準備 水や食料、医薬品、衛生用品などの非常用備蓄品を準備し、最低3日分は確保することが望ましい。特に乳幼児や高齢者、障がい者がいる家庭では、個別の必要品も忘れずに備える必要がある。 3. 地域の人々とのつながりを深める 災害時には行政の支援がすぐには届かないことが多いため、近隣住民との助け合いが重要となる。平時から地域の防災ネットワークを構築し、顔の見える関係を築いておくことが、共助の力を高めることにつながる。

最後に、草氏は「震災の記憶を風化させず、次の世代に伝えていくことが重要である」と述べ、今後も防災活動が続けていく決意を表明した。災害はいつ、どこで発生するかわからないからこそ、日頃の備えと地域のつながりが、いざというときに命を守る力になることを改めて強調した。



開催地より

地震災害に遭遇し、過酷な避難所生活を強いられた方からの貴重な体験談と教訓を、実際に耳にする影響力は計り知れないものがあった。「語り部」の言葉を通じ、防災へ依存体質であることを脱却し、被災者になってしまった時の心構えを持つことに活かされたと思う。